

生きているだけでいい

いろいろな見え方を通じて 視覚障害の当事者から⑩

これまで視覚障害者の気持ちや福祉制度の改善点など、さまざまな観点から執筆してきました。その中で一番伝えたかったのは「障害者、健常者関係なく、みんな一人ではない」ということです。

気付かないだけで、悩んでいる障害者の方はすぐそばにいて、社会へのつながりを求めています。支援する人もどのようにして当事者への接点をつくっていくか考えていることでしょう。ただ問題提起をして終わりというのではなく、これからも皆さんとつながっていきたいと思っています。そのつながりが何か新しいアクションになり、誰もが幸せを感じられる社会になればいいと考えます。

コロナ禍の影響もあり、オンラインでのコミュニケーションや会合が増え、全国の人とつながりやすくなりました。インターネットや交流サイト（SNS）を使っている若い世代は、障害者団体に入らなくても情報が得られる時代でもあります。しかし、実際に会って話をしたり、情報交換したりできる仲間の存在は大きく、オンラインでは得られない良さがあると思うのです。

さて、最後にお伝えしたいことは「障害があっても、なくても生きているだけでいい」ということです。これは病気が進行して視力が落ち、落ち込んでいた私に妻がかけてくれた言葉です。頑張っただけに進まないといけないんだと思っていた心が、この言葉のおかげで楽になったことを覚えています。

妻、娘、息子一。家族がいなかったら、この考え方にも気付けなかったでしょうし、誰もが住みやすい社会を実現する活動もしていなかったと思います。だからこそ家族に感謝し、一緒に時間を大切にしながらこれからも過ごしていきたいと思っています。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。読者の方が何か一つでも共感していただけたなら、うれしいです。

（山元正史、大分県網膜色素変性症協会員）＝終わり＝



山元さんのホームページのQRコード